



TITLE:

全学共通科目「情報探索入門」の 試み - 図書館の役割について

AUTHOR(S):

慈道, 佐代子

CITATION:

慈道, 佐代子. 全学共通科目「情報探索入門」の試み - 図書館の役割について. 静脩 1998, 35(1): 5-6

ISSUE DATE:

1998-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37494>

RIGHT:

秩序そのままに書きつける場なのである。その意味で、通常の書物が何らかの首尾一貫性を持ち、常識的な作品が何らかの秩序や終結を含まざるえないのとは異なり、『カイエ』はひとつの「反=作品」であるといえるだろう。一般化していえば、マニュスクリとは、近代の印刷された書物が何らかの形で不可避免的にもたざるをえなかった首尾一貫性や起承転結から無縁な領域であり、限りない反復、削除、加筆、書き換えなどが行われる「反=書物」な場なのである。

こうしてヴァレリーは文学を「精神化」するのだが、注意しておくべきことは、ヴァレリーのいう「精神」とは明晰な知性とか明証的な意識のことではないということである。「精神」とは彼にとっては「無秩序」そのものである。

「作品の生産においては、創作行為は限定できないものとの接触によって生じる」とヴァレリーは書いている。そのため作家は無力であり、制作に必要なものが無秩序たる精神から生じて

くるのを「待つ」ほかはない。すでに見たように、マニュスクリという作家の「私的個人的」領域は、印刷などの複製技術の発達や資本主義経済の発展のいわばネガのようなものとして成立したが、そのように現実世界を回避することで見出された「精神の領域」はヴァレリーにとって無秩序であった。ところがこの「無秩序」こそ彼が『精神の危機』でとりだした現代世界の特徴なのである。作家の親近性の領域として見出されたはずの「精神の領域」は、作家が無力にならざるえないような無秩序の領域、いかなれば現実の世界とは別のもうひとつの「外部」へと変質する。つまり「内部」を通じてもうひとつの「外部」が見出されてしまったのだ。このように近代は、書物を「モノ=商品」としてあからさまに規定するとともに、以上のようなさまざまな現象を文学領域にひきおこしたのである。

(もりもと あつお)

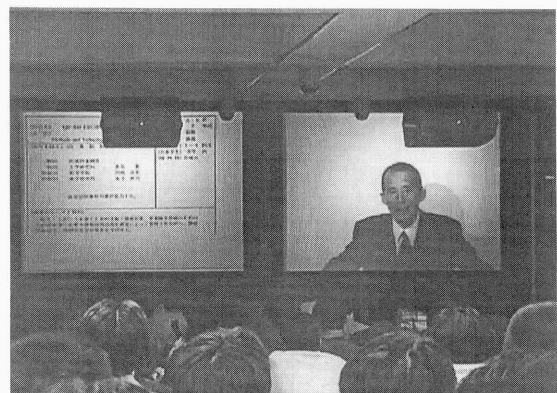
全学共通科目「情報探索入門」の試み 図書館の役割について

平成10年度から、附属図書館が提供部局になって全学共通科目「情報探索入門」を開講した。前期科目として、授業開始日である4月13日(月)にはじまり、7月13日(月)に終了した。長尾真総長は、工学部教授の時代から「情報活用法についてはシステムティックに学生に教育する必要がある。図書館が中心になってやる情報活用に関する講義科目は、全国の国立大学ではほとんど例がないがその先鞭をつけたい。図書館職員の勉強にもなり、図書館職員の学内における存在価値が一層広く認識されるようになる。図書館職員と一緒に情報リテラシーの問題に取り組むことが必要である」と述べておられたが、図書館長時代の平成9年2月に具体的な授業計画の提案がなされ、何度も話し合いを重ねることによって実現するに至ったものである。講義は長尾総長を先頭に、川崎良孝教育学研究科教授、金子周司薬学研究科助教

授、黒橋禎夫情報学研究科講師とリレー式に担当し、最後に菊池光造図書館長が締めくくった。各講義に対応して演習をもうけ、図書館職員は全学から15名が演習を担当する形でこの科目に積極的に参加したことに大きな意義がある。

この科目の概略は次の通りである。

① 開講の目的は、「報告書を書くための情



報収集、卒業論文のための文献調査等に必要の情報活用技術を演習によって習得させながら、情報図書館学、情報探索学の概要を学ばせる。文系、理系それぞれに適した演習を用意し、学生に選択させて具体的な技術を習得させる」ことにある。

- ② 京都大学では学生の科目選択の自由度が大きいという伝統があるので、配当学年は1～4回生とする。ただし、パソコンの使い方を習熟している学生が対象。
- ③ 初めての試みなので1クラスとし、受講者数は100～150人を想定する。
- ④ 開講期は前期とする（特に積極的な理由はない）。
- ⑤ 講義担当教官は、長尾総長の他に菊池図書館長、川崎教授、金子助教授、黒橋講師。
- ⑥ 授業は次の13回として、レポート提出による単位認定とする。

第1講 大学図書館への招待（1回）

第2・3講 分類の一般概念と分類理論（2回）

第4講 情報の種類（1回）

第5・6講 目録情報とその利用法（2回）

第7・8講 データベースの種類とその利用法（2回）

第9・10講 インターネット情報と利用法（2回）

第11・12講 参考資料の種々とその利用（2回）

第13講 図書館情報、および図書館の種類とその機能（1回）

2回あるものについては、1回は演習にする。

- ⑦ 演習においては補助者として図書館職員が協力する。演習補助者は部局図書室からも参加してもらう。

第1講は長尾総長が担当した。（写真）講義は遠隔講義システムを利用できる法経第二教室を使用し、質疑応答時には双方向の遠隔授業となった。第2講以降は総合人間学部の教室と演習室を使用した。第11・12講：「参考資料の種々とその利用」では、附属図書館を会場に1階備付の参考図書を利用した演習も行われた。13回にわたって行われた講義と演習をここで紹介することはできないが、アンケートをとった結果、概ね「役に立つと思う」と好評だった。"来年も開講されたら後輩に薦めるか"という設問には、59.4%の学生が「薦める」と回答している。大変うれしいことである。

（参考調査掛長 慈道佐代子）

シリーズ「京都大学図書館巡り」 序

京都大学には、附属図書館の他、各学部・教室・研究所などに大小合わせて60ほどの図書館・室があります。これらの図書室（館）がそれぞれ独自性を保ちつつ、有機的に連携を取りながら本学の図書館サービスが展開されています。

昨年（1997年）、京都大学は創立百周年を迎えましたが、図書館もそれにほぼ匹敵するくらいの歴史を持っています。この長い時間の中でさまざまな出来事・変化があったことと思えますし、今でも毎日いろいろな動きがあります。そこでここでは、利用者の動向に注目して最近の顕著な傾向を紹介したいと思います。

1つ目は学生の図書館利用の変化です。本学の図書館は、おおよその傾向として附属図書館と総合人間学部図書館（旧・教養部図書館）が主に基礎的・一般教育向けの資料を揃え、各部局図書室（館）がより高度で専門的な資料を揃えているということが言えます。学生たちは教養課程の時代には教養部図書館で過ごし、専門領域に進むに従って各部局図書室（館）に親しんでいくというのが大体の流れでした。ところが1993年3月をもって教養部が廃止されるといきなり各部局図書室（館）に1、2回生が多数訪れるという新しい傾向が見られるようになりました。各部局図書室（館）の蔵書構成は前述